

# エンゲージメント

## 第 1 章

Kumari

A close-up photograph of a human hand, palm up, holding a glowing, golden orb of light. The orb is composed of many small, bright particles, creating a shimmering effect. The background is a soft, out-of-focus blue and white light, suggesting a bright, ethereal atmosphere.

マウイという島は、愛の波動に満ち溢れていると  
誰かが言った。

「ここに来なさい」と  
傷を負った魂たちを導き  
シンの力を下さる島であると...

時々、この話を思い出す。  
なのに、思い出せないのだ。  
誰が言ったことなのか  
いつ、何処で  
誰からこの話を聞いたのか...

# 第 1 章

『異国の恋人が自分の子供を身ごもりました。

しかし、その男の家族は異国の女性のことを認めませんでした。

それでも彼は彼女を見捨てることは出来ず、家族の反対を押し切りやがて彼女の元へやって来ました。

彼女の傍には小さな女の子がいました。

彼は自分の子供を紹介されると、目に涙をいっぱいためて、

「大きくなったね...」

そう言って、その子をいつまでも抱きしめていました...』

高々とそびえ立つ<sup>やし</sup>椰子の木はどんな強風にも逆らわず、右へ左へと身をまかせ、大きな揺れを楽しんでいるかのようであった。ザワザワと揺れている椰子の葉ずれの音を、いつまでもいつまでもローザは瞼を閉じて聞いていた。

彼女の名前は、ローザ・ドリー。二カ月前に六十三歳になったばかり。

ローザの目の前には白い砂浜が広がっている。彼女はマウイ島の海が一望出来る高級住宅街の一角に暮らし、結婚もせずに長い年月をひとり、その地で過ごしてきた。その日、ローザは家のテラスに座り、長年に渡り書き綴ってきた自分のノートを読み返していた。

『異国の恋人が自分の子供を身ごもりました...』

その文章を書いた日からもう五十年の歳月が流れていたが、まるで昨日のことにように思い出されていく。

午後のマウイ島は多くの観光客で賑わっていた。遠くの、バカンスを楽しむ人達の笑い声を聞きながら、ローザは今日の午前中に起きた出来事をノートにそっと書き綴った。

<sup>がん</sup>  
癌を宣告された...。

今日の出来事はその言葉から始まった。

ノートは十三歳の時から、特別なことがあった日や特別な言葉が降りてきた時、それらを「覚え書き」として書き綴ってきたものである。一年にほぼ一冊。ノートは今年でちょうど五十冊目になっていた。昨日までは真っ白であった最初の頁がこの日、ローザの文字で埋めつくされた。

癌を宣告された。

今日、病院で検査の結果を聞いた。

私の命はそう長くないと宣告される。

それでも、体の調子は悪くない。

暖かな風が心地よく、午後はテラスでうたた寝をした。

浅い眠りの中、久しぶりにこんな言葉が降りてきた。

『最後の仕事を終えたら肉体から離れ、長い休息を取りなさい

近々、後継者をあなたの元に送ろう。残された時間は自分の為に使いなさい。

今のうちに逢いたい人に会っておくがよい』

数時間前、ローザは担当医師より癌の宣告を受けていた。手の施しようのない進行性の悪性リンパ腫が見つかり、身寄りのない彼女はその宣告を一人で受け止めていた。

担当医に大きな病院での入院治療を薦められ、その時に、他に連絡できる人を教えて頂きたいとも言われたが、ローザは今後の治療のことも連絡できる人のことも次の診察の時にお伝えしますとだけ答えて病院を後にした。彼女は自分の延命治療を望んでおらず、そう長くないと宣告された寿命の時を心静かに迎えることにしたのだった。

ベンを置いて砂浜を眺めていると、五十代くらいの三人の女性達がローザに挨拶をしてきた。東洋人のようである。ローザの住んでいる住宅の街並みに関心をもった彼女達は家の庭先まで足を踏み入れたが、清浄感漂うローザの姿を見て焦るよりも先に安堵した様子だった。

ローザの家の庭は芝生と植物をバランスよく配置しており、その庭園の美しさに足を踏み入れてしまう人も少なくなかった。ハイビスカスなどの亜熱帯植物の木の下には、彼女が何十年もの歳月をかけて育ててきた多種多様のハーブが植えられており、沢山の植物が庭一面に生息している。花壇の煉瓦は奇麗に統一され、目の中に無駄なものは何ひとつ入っていない。また風に揺れている多くの植物を見ていると、どうぞいらっしやい、と手招きされているようでつい足を踏み入れてしまう。すると、本当に優しくそうな初老の女性がそこに座っているのだった。

ローザはテラスから外を眺めていた。ダークブラウンの髪をうしろにまとめ、静かにそこに座っていたが、ゆっくりと立ち上がり挨拶をしてくれた女性達の傍に歩み寄った。彼女達は日本人のようだった。気品よく歩いて来るローザの姿に少し慌て様子で、「ハロー」と言った。

「あ、あの、とても、美しいひと、だった、ので、声、かけて、しまい、ました。私たち、イングリッシュ、ノーノー」

ローザはまだ何も言っていなかったが、彼女達は日本語を覚えてたの外国人のような口調で、必死に胸の前で腕を交差し、バツ、バツ、を繰り返した。息を合わせたように三人とも同じ動作を見せている。

それでもローザは今の奇妙な口調の日本語を、理解できたのだった。

「こんにちは。日本からいらしたのですね、観光ですか？」

彼女は訛りのないきれいな日本語で話しかけた。

「……」 「……」 「……」

日本人の彼女達は現地の女性に、いらしたのですね、などの綺麗な日本語を聞かされるなど思ってもおらず、束の間、言葉を失った。

西洋と東洋の血がバランスよく交じり合っているローザの容姿は、今までも多くの人達を魅了してきた。若かりし頃の彼女は周りの人達から、「マウイの妖精」と呼ばれたほどの美貌だった。六十歳を過ぎた今でもその美しさは変わらない。

ローザは彼女達に日本語の発音を褒められると、自分の父親が日本人であったことを話した。その話を聞いた彼女達はいっそうローザに親しみを覚えた様子で、ひとりの女性が顔立ちの整ったローザのことを「羨ましい」と言った。

ローザはそんな彼女達を見てただ静かに微笑んだ。

六十年以上も昔、生まれたばかりのローザの顔を見た周りの大人達は、父親は十二人かと、その幼子の前で母親に尋ねていた。ナニジン…ナニジン…ナニジン…。

ゆりかごの中で眠る小さな幼子、ローザの耳にはその言葉が常に入り込んでいた。そして、あなたの父親は日本人であると、母親からそう聞かされたのはローザが六歳の時であった。

しかし、ローザの母親はその男との再会を果たせぬまま四十代の若さでこの世を去り、また、十八年前にローザの元に届いた一通の手紙によって、日本人である父親もすでに他界していることを知った。その手紙には差出し人の住所は記載されておらず、故人の名前である、

「<sup>さえき そういちろう</sup>佐伯 創 一郎」の下に、「故人親族より」とだけ書かれていた。

探し出せば血縁者は何処かには存在するが、それでもローザはひとりで最期を迎える準備を始めていた。

\*

\*

余命を宣告されたあともローザの生活は普段と何一つ変わらず、毎日、夜明け前の砂浜を歩き、閉じた瞼に朝の光を感じるまで感謝の祈りを捧げ、一日に一度、軽い食事を取り、あとはハーブティーがあれば十分であった。彼女は美しい海辺が一望できるマウイ島の一等地に暮らしているが、生活ぶりはとても質素なものだった。

ローザは自分の命はそう長くないと知った日から新しい仕事は全て断る予定でいた。地元でリゾートホテルを営んでいるオーナーの知人男性だけには、体調がすぐれない旨の話をし、しばらく仕事を休むことを伝えていた。ホテルオーナーとは歳が近く、若い頃にローザがそのオーナーのホテルで働いていたこともあり気心知れる間柄だった。

余命を宣告された日の、『最後の仕事を終えたら肉体から離れ、長い休息を取りなさい』という自分の中に降りてきた言葉が気になり、ローザは最後の仕事となる人物のことを考えていた。その者にはまだ巡り会っていないのだろうかとも思うが、こればかりは神に委ねるしかなかった。彼女は、目の前の人があるどのような使命を持ってこの世に生を受けたのか、それらを感じ取れる特殊な能力があった。また苦しみや悲しみに付きまといられる者達の、それらの理由を色々な形で知ることができ、必要な事柄を相手に伝えてあげる……それが彼女の仕事であった。

もうすぐマウイ島は夜が明けようとしていた。小さな島々が黒く浮き上がり、その島々を囲うようにヤシの木も姿を現しはじめた。

最後の仕事、最後に逢いたい人、最後の仕事、最後に逢いたい人……

夜明け前の砂浜のベンチの上でローザはその言葉を繰り返していた。いつの間にか体の力は抜け、瞼も完全に閉じられた。呪文のように繰り返している言葉と、暗闇から響く静かな波の音はまるで催眠をかけるように、彼女を眠りの中へ誘った。

しばらくすると今まで聞こえていた波の音は止み、ローザの目の前にひとりの男性が現れた。長身の、その背格好から年齢は三十代くらいに感じられるが、よくわからない。それでもこの数日、頻繁に自分の夢の中に現れる男性であることはわかった。「この夢は意味のあるものなのですね」と、ローザは目の前の男性に尋ねた。だが男は何も答えなかった。男の顔もぼやけたままである。ローザは目の前で起きていることの意味を知りたくてゆっくりと立ち上がった。

『わたくしに、会いに来て下さったのですか？』

そう声を掛けながらローザは男に近づいていく。

『……』

男は何も答えない。

『なぜにあなたは、いつもわたくしの元に来て下さるのですか？』

『……』

『でも、夢であってもあなたにお会いできてよかった』

『……』

『もうわたくしのことは忘れて、あなたは、あなたを待つ<sup>ひと</sup>女性の元へお行きなさい』

『……』

『どうか、最後にあなたのお顔をよく見せて頂けませんか』

『……』

ローザが何を話しかけても男は無言のままじっとそこに立っていた。どんなに近付いても男の顔はぼやけて見えず、差し出した手が彼の頬に触れることもなかった。

その時だった、ローザの声を遮るように強い風が吹き付けた。数本の前髪に顔を<sup>くすぐ</sup>擦られ、ローザの指先は無意識に動いた。その瞬間、はっと瞼が開いた。異様に鼓動が高鳴っている。彼女はゆっくりと周りを見渡したが、景色は深い藍に覆われているだけだった。今しがた目の前にいた男の姿は何処にもなく、その男に歩み寄っていたはずの自分の体はベンチの上にあった。

ローザは余命を宣告された日、私には息子がひとりおりますが事情があってもう長いこと会っておりませんと、担当医に嘘をついていた。とはいえ、血は繋がっていなくとも自分の息子のように情をかけてきた人物は確かに存在しており、夢の中に出てくる男性はその彼なのだろうかと思うこともあるが、彼であるならどんなに顔がぼやけていてもわかる自信はあった。では夢の中の男性は一体誰なのだろうか…。何度もそう考えてはみるが、思い当たる人物は誰もいなかった。

何処を見ともなくローザは少し離れた砂浜に視線を向けたままでいた。目が慣れてくるとかなり離れた遠くのベンチの上に誰かが座っているような、黒い人影が浮かび上がった。海辺に出るにはまだ早い時間、誰もいないと思っていた夜明け前の砂浜で彼女は人影を見たのである。



その人影は男性だった。ブロンズ色の髪が風に靡いている。握り締めた両手に<sup>ひたい</sup>額をのせて俯いている。その姿は祈りを捧げているようにも見えるが、男はただベンチに座っているだけのようだった。

今度は夢ではなく、男の姿はローザの目にはっきりと映し出されていた。

彼はあの家の住人かも知れない、とローザはそう思った。数カ月前から長年使われていなかった海辺の別荘に人が住みはじめており、その別荘は男が座る場所からそう遠くはなかった。家のオーナーはフランス人画家であると、近くの住人からそう聞いたことがあった。今までにローザがオーナーらしき人物を見たことはないが、数日前にその家のテラスで黒髪の女性の姿を一度だけ見かけたことがあった。遠くて顔はわからなかったが韓国か日本の<sup>ひと</sup>女性だろうと、そう思いながら家の前を通り過ぎたのをローザは思い出したのだった。

\*

\*

残された時間は自分の為に使いなさい、と自分の中に降りてきた言葉のように、受診した病院でも「自分の為に…」という言葉でローザは何度も聞かされていた。一日に一度だけしかとらない食生活を医師に指摘されたのである。ヒーラーと呼ばれるようになってから朝も夜も関係なく、多くの人達がローザの元を訪ねて来た。休憩を取る余裕もなくなり気付いた時には食事を取らない生活に彼女の体は完全に慣れてしまっていた。苦しんでいる人達を救い出すため、依頼者の守護神の声や目の前に移し映し出されるビジョンに対して、ローザは研ぎ澄まされた能力を惜しみなく使ってきた。

しかし、そんな彼女も自分の夢の中に現れるようになった男性の意味は一向にわからぬままだった。この夢は自分の過去世の記憶なのだろうかと思うこともあるが、何も答えは見つからない。男が夢に現れる時は激しい耳鳴りを感じるようになっていた。その激しい耳鳴りは決まって明け方にやってきた。キー……ン、という耳鳴りが突然鳴り出すと、それが合図であるかのように男はローザの夢に現れるのだった。

その日の明け方も、耳鳴りはやってきた。

彼女は息を潜めて両方の手をぎゅっと握り締める。実際には握り締めていないのかも知れないが指を力強く丸めた感覚はあり、そして何より自分は目覚めているという意識の中で、これから起こることを身構えるのだった。しかし目覚めている感覚はありながらもローザの体は全身を鎖くさりで縛くくられているみたいに全く動かず、瞼を開けることもできなかった。そのまま何の抵抗も出来ずにいるとつま先がジリジリと痺れ出す。それは、つま先から得体の知れぬ強烈なエネルギーが体の中に入り込んでくる前触れであり、その痺れは徐々に大きな波を唸らせるように、ふくらはぎから膝、みぞおち、胸、喉…と、ゆっくりと上昇してくるのだった。そして喉を通り過ぎると耳鳴りとエネルギーは最高潮になり、最後は必死に噛み締めている歯が全部砕け落ちてしまう。歯が砕けるほど強く歯を食いしばっていたのか、それともその得体の知れぬエネルギーが砕いていったのかはわからないが、歯が砕ける時、本当にグシャリという生々しい感触もあった。

そのエネルギーが通り過ぎたあとは嘘のようにローザの耳鳴りは消え、体も軽くなり、息もつけないほどの苦しみから開放される。そしてこのあと男は彼女の前に現れるのだった。

ザー…ザー…ザー…ザー…

ローザは何処どこからともなく聞こえてくる波の音に耳を傾けていた。だが、聞こえている波音はマウイ島の波とは少し違っていた。ここはどこなのだろうかと思うが、一向にわからない。間もなくして人の足音が感じられていく。砂浜を歩く音ではあるが、とても重たそうな足取りで一步一步ゆっくり歩いている。ローザはうっすらと目を開けて見た。そこにはいつもの男性の気配があった。

その日のローザは、なぜかその男に負ぶわれていた。

目覚めている感覚はあるがローザは声を出すことも出来ず、だらりと垂れ下がっている自分の腕をボンヤリと見つめていた。男の首に自分の腕を絡めようとしたが、力が入らない。男の横顔がすぐ傍にあるというのに自分の顔を持ち上げることもできずにいる。見えるものは自分の腕だけだった。その腕は異様に青白く、私は死んでしまったのだろうか、そう感じずにはいられなかった。

その時だった、ふいにローザの意識の中に激しい感情が入り込んできた。

『この卑劣な出来事を、死んでも、生まれ変わっても、絶対に僕は忘れない。忘れてはいけない…』

それはローザを負っている男性の意識から溢れ出た強烈な想いだった。ふたりの胸の位地がぴったりと重なり合っているせいか、男の感情の強さは痛いほどローザにも伝わっていた。

この彼に何があったのか、自分はどうしてこの男性に負われているのだろうか、この人は一体誰なのだろうか、卑劣な出来事とは何なのか、何があったのか…、ローザは考えてみるが思い当たるものは何もない。

『あなたが受けた傷を、痛みを、苦しみを…、僕は絶対に忘れない…』

男の怒りの感情はいつしか涙に変わっていく。

その涙はポトリポトリとローザの腕をつたい地面に落ちていく。その時、涙に濡れて緩ゆるんでしまったのか、それともサイズが合っていなかったのか、自分の右手中指からスルリと指輪が抜け落ちる感触があった。ローザは必死にその指輪を探そうとするが、その時も頭を上げることは出来なかった。

『神よ。わたくしは今、全ての苦しみから解放されております。そのことを、わたくしを負い、さ迷い歩くこの男性ひとにどうか伝えて頂けませんか。そしていつかまた、この地上にわたくしの魂が生まれ変われる時がありましたら、どうかその時は他人ひとの手ではなく肉体の限界で生涯を終わらせて下さい…』

動かぬ体をそのままに、ローザは祈りを神に捧げていた。

ローザの瞼が静かに開いた。

目覚めている、という意識は錯覚にすぎなかった。夢であったことに気付かされていく。ローザはベッドに横たわったまま噛み締めた歯が砕けていないか、確認した。体が動くようになるとゆっくりと自分の腕をさすり男の涙の痕がないか、確認した。砕けてしまったと思われた歯はすべてきれいに生え揃っている。男の涙で濡れたはずの腕もどこも湿り気は帯びておらず、そして、私は死んでしまったのだろうかと思った自分自身の肉体もしっかりと息づいていた。

それでもローザの腕には男の涙の感触は生々しく残っていた。

『いつかまた、この地上にわたくしの魂が生まれ変わる時がありましたら、どうかその時は他人の手ではなく肉体の限界で生涯を終わらせて下さい…』

夢の中のその祈りはあまりにもリアルだった。

いつの時代そのような祈りを神に捧げたのだろうかとローザは思うが、わからぬままである。そして男の夢を見るようになった日から彼女は、このような祈りも神に捧げているのだった。

(神よ。わたくしにはもう時間がありません。夢に出てくるあの男性をこの場所に導く力もありません。彼が過去世の悲しみと怒りを残したままこの地上の何処かに生まれ変わっているのですしたら、どうか、あなた様のお力で彼の苦しみを解き放してあげてはもらえませんか…)

第2章に続く